

奴隸少女との生活

hiyamugi

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ある病院を一人で支えている男のもとに

突如引き取られた奴隸の少女。

今まで暴力しか知ることができなかつた奴隸の少女。

打ち明けたい男と、打ち明けることが怖い少女の物語。

目次

奴隸との生活	1日目	朝	「奴隸少女との出会い」	—
奴隸との生活	1日目	昼	「奴隸少女の扱い方」	—
2日目	夜	「奴隸少女の涙」	—	—
朝	—	—	—	—
「奴隸少女の笑み」	—	—	—	—

奴隸との生活 1日目 朝 「奴隸少女との出会い」

薄暗い埃まみれの物置の一端、そこには一人の女の子が体を小さく丸めて座っていた。身にまとっているのは血痕のついた薄汚れいる布切れ一枚、からだ中には見るに堪えない火傷の痕、乱れた白銀の髪の下に覗く瞳にもはや光はなかつた。

私は奴隸、私は感情を持たない人形、私はご主人様の玩具。

誰も信用しちゃいけない。

なにも感じちゃいけない。

それが私にとつて一番幸せな生き方。

希望なんて持つちやダメ。期待なんてしない。だつて・・・

私は奴隸。もう、裏切られて絶望を見るのは嫌だから。

ある日の早朝、私は馬車の荷車の中で道を走る音だけを聞いて揺ら
れている。

これから新しいご主人様のもとへ行くらしい。以前お世話になつ
ていたご主人様がお亡くなりになつてから、遺産相続の一部として私
はある商人の方のもとに預けられた。

行き先はわからぬけどどこに行つても私の扱いは変わらない。
私の生きがいはご主人様のために悲鳴をあげること。悲鳴をあげて
ご主人様に喜んでもらえさえすればご飯はもらえる。

そんなことを考えていると馬車が止まつた。

「おい、降りろ」

商人の方の声が荷車の外から聞こえる。

「はい」

返事をし、奴隸の女の子は火傷の見える素足で荷車から地面へと降
りる。久しぶりに浴びる太陽の光。今まで地下室で飼われていた彼
女にはあまりにも眩しく、温かく思えた。

(光を浴びるなんていいらいかな・・・次、太陽の下に出られると
きは私・・・生きてるのかな・・・ふふ)

「お前はここで少し待つてろ」

商人のおじさんは奴隸の彼女にそう言い残し、目の前の少し古びた大きめの建物の中へと入つていった。

奴隸の少女は言われるがまま、建物の入り口手前でこれが最後と言わんばかりに太陽の光を一人堪能するのであつた。

（数分前）

「えーと…あの書類どこしまつたつけ？まざい…實にまざいぞ…これは」

ある診療室で一人、医者である男は焦つていた。

名はベルト、歳は28と医者としては若く、身長は175cmと通常男性の背丈ほど。目は垂れていて常に眠そうな雰囲気を醸し出していた。生まれてこの方、女性と付き合うどころかまともに接したこともない。

「あーあ…こんな町はずれの病院じゃ患者もそんなに集まらないし。親父の病院を継いだけど俺向いてないのかな」

ベルトはこの病院を継いで約5年、一人で切り盛りしていた。ベルトの父は五年前に流行りの病にかかり死亡している。それまでベルトに病院を継ぐ意思なんてものはこれっぽつちもなかつた。それでも、ベルトの父が息を引き取る直前に絞り出して言つた言葉

「俺の病院を…頼むぞ」

こんなことを言われてしまつては息子として無下にするわけにはいかない。

それからというもの必死で医学を学び、毎晩父のレポートや書物を読み漁つた。

彼のいる街に病院自体は少なく、この病院も折りの病院だ。だがそれ以上に立地が悪い。お年寄りの患者や子供には少々荷が重いのだ。

「悪いな親父…やっぱり俺だけじゃ荷が重いわ。少なくとも血を分けた兄弟でもいてくれればなあ」

なんて意味のない愚痴をもらしながらベルトが書類探しを再開しようとしたその時、受付のほうから呼び鈴を鳴らす音が聞こえてき

た。

「ん？ 患者か？・・はーーい！ 少々お待ちください!!」

ベルトは小走りで受付まで向かう。病院 자체以外に広い構造であり、返事をしてから十秒ほど待たせてしまった。

「申し訳ございません！ 大変お待たせいたしました！ 本日はどうなさいましたか？」

ベルトは自慢の営業スマイルをどこかで会つたことのあるような見覚えのある男性へと向けた。

「どうも、先生。覚えておいでですか？」

やはりどこかで会つたことがあるようだ。ベルトはここ最近の記憶から過去の記憶まで脳をフル回転で思い出そうとする。

「昔先生に命を拾つてもらつたものですよ」

「あ、あのときの」

そういわれるとたしかに見覚えのある顔だ。およそ一年前くらいに街中で倒れていた男性を治療したことがあつた。あきらかに関わつてはいけないトラブルだとは思つたが彼は医者だ。怪我人を前に見て見ぬふりなんてできない。

「あの時はろくにお礼もできずに去つてしまつて、申し訳ありませんでした。偶然近くの街に用事がありましたのでお礼に参つたのです」

「いえいえ、元気そうでなによりです。もしよければお茶でも」

少し怪しい臭いのする男だがわざわざお礼に来たのだから、悪い人ではないのだろう。

「いえ、長居するつもりはありませんのでお構いなく。それよりこれをお・・」

男から渡されたのは厚めの封筒だ。中身を除くと明らかに治療費よりも多めに用意されている札束であつた。

「い、いや、こんなに・・受け取れませんよ」

「支払いが遅れてしまつたほんのお詫びです」

「お、お詫びつて・・」

さすがのベルトも急な大金に免疫はなく情けない声を出してしま

う。そんなベルトをよそに男は続ける。

「あともう一つ、持つてきたものがあるのです。おい、入れ」

男の声の後に視界へ入ってきたのは一人の女の子であった。彼女はベルトと目を合わせることもなくお辞儀をする。背丈も小さくおそらくまだ十代であろう。それらの情報より先に目に映つたのは痛々しいほど火傷の痕。

「まあ詳しい話は後にしてどうですか、先生。余計なお世話でしょうが先生は今もおひとりで暮らしているご様子。ここは一人でも奴隸を引き取つてみてはいかがでしょう？」

まさに開いた口が閉まらないとはこのことだ。

（奴隸!?え!?この男は何を言つてるんだ…こんな小さくてか弱そうな女の子が奴隸？じやあこの子の傷は意図的につけられたもののか？）

「も、もし俺が引き取らなかつた場合この子は？…？」

聞きたいことがたくさんある中、一番この質問の答えがひつかつた。その質問に男は

「そうですねえ、残念ですが処分でしようかね」

体の底から湧き上がるような憎悪、怒り、さまざま感情があふれ出てきた。いつの間にか握りしめていた両手には滴るほどの手汗が握られていた。

（なんでこんな簡単に処分なんて言葉が出てくるんだ!?処分つてあれだろ…殺すつてことだろ）

「どうしますか？先生」

男のその質問に対するベルトの答えはもう決まっていた。いや、人間であるならこの質問 자체おかしい。

「うちに…引き取りましょう」

ベルトのその答えに男は怪しげな笑みを返し、彼女をおいて去つていくのであった。

奴隸との生活 1日目 昼 「奴隸少女の扱い方」

(さてさて、これからどうしたものかな)

ベルトは部屋の片隅で小さくなつて座つている少女を横目に頭を抱えていた。彼女はついさつき、昔に命を救つた商人の男から譲り受けた子だ。

(後先考えずに返事してしまつた。でも殺されるとわかつていてそのまま追い返すなんてできるわけがない)

彼女はと、ずつと天井の一点を光のない瞳で見つめるだけ。生氣なんて全くと言つていいくほど感じられない。

(とりあえず話してみないことには始まらないよな。少しずつでもお互いを知ることができれば、！)

ベルトは使い古したイスから腰を上げ奴隸の彼女の前まで歩み寄る。それでも彼女と目を合わすことができない。というより合わせようとしてくれないので。

「初めまして。俺の名前はベルト、一応この病院のオーナーで医者なんだ。ていつてもこの病院には俺しかいないんだけどね。君の名前は？」

ベルトが声をかけると相変わらず目を合わせてはくれないがその質問に血の氣のない唇から淡々と言葉を紡いでくれた。

「初めまして。私の名前はシルヴィと申します。・・・」

「・・・」

「え、えっと、失礼かもしけないけど歳は何歳かな？」

「いえ。たぶん18歳くらいかと思います」

「たぶん？」

「はい」

「・・・」

2人の間にはまたもや沈黙が流れる。病院のある一室には時計の振り子の音、窓の外から聞こえてくる風音、そしてベルトの息を呑む音だけが響き渡るのであつた。

☆

シルヴィが新しいお家に連れてこられてから小一時間、新しいご主人様はいくつか質問をしてからまたもといた席に座つて何かを考え込んでいた。

（どうしたのかな、もしかしてこれからどうやって悲鳴を上げさせるか考えているのかな？）

今、シルヴィの脳内には以前飼われていたご主人様にされてきたことを再び思い出していた。

以前のご主人様はとにかく悲鳴が大好きで特にお気に入りのが薬品を使っての遊びだつた。その薬品を肌にかけられるとたちまちにその箇所が火で炙られているように熱くなり、皮膚はいとも簡単にその薬品と共に地へと流れ落ちた。

（ここは病院つていつてたし、きっともつと痛くて、苦しいお薬がたくさんあるんだろうな）

シルヴィは窓際に置いてある棚の段を上からゆづくり眺めていた。今まで文字を習うことがなかつたシルヴィには薬品のラベルの文字は読めない。

だが、どの薬品を見ても昔のご主人様の持つっていたあの薬品を連想させる。

（ここが私の最後のお家になるのかな・・・）

シルヴィはただ理由もなく棚の薬品一つ一つの読めない文字を目で追つていた。

☆

（困った。實に困つたな。質問してもその答えしか返してくれない）

ベルトはもといたイスに腰掛け頭を抱える。今まで女子という生き物と接する機会なんてほとんどなかつた。ベルトの父親が生きていた頃は妹とも同居していたが父親が死去してからは父親の姉のもとに引き取られていた。

グゥウウ・・・

病院の一室の沈黙を破つたのはベルトの品のない腹の虫だつた。それでもシルヴィはなにも反応を示さない。

(無い知恵を絞つても解決策なんてでてこないだろ。もう昼時だ。とりあえず飯だ)

「シルヴィちゃん、もうお昼の時間だからご飯にしよう。リビングはこっちにあるからついてきて」

「はい」

シルヴィはか細い腕を支点に立ち上がり、ベルトのもとに歩いてくる。側に寄つてみてわかる。

白銀の髪はまつたく手入れなどされておらずまともにお風呂も入れてないのであろう。腕や足を見るに細すぎる。確実に栄養が足りていない。そしてシルヴィの瞳、孤独・絶望・諦め。とても冷たい瞳をしていた。

(きつとこの子はここに来るまでに俺なんかには想像もつかないような辛くて酷いことをされていたんだろうな。そんな日常が彼女には当たり前で、生きるために仕方のないことだ・・・。簡単に心を開いてくれるなんて思えないけど少しづつでも彼女との距離を縮めたい。そのためにも・・・)

「じゃ、シルヴィちゃんはそこのイスに座つて待つてて」

「いえ、私は床で大丈夫です。私のようなものが座つてはご主人様のイスが汚れてしまします」

ベルトの心がズキッと痛む。

(いつたいどれだけ酷い扱いをされていたんだ)

「そんなこと気にしなくて良いんだよ。もうシルヴィちゃんはこの家の同居人なんだから好きなようにくつろいで」

「ありがとうございます」

シルヴィは感謝の言葉を紡ぐのとは裏腹に部屋の端の床に座つた。ベルトはそんなシルヴィの行動を見て心が締め付けられるような哀しさを感じた。

(きつとこの調子だとまともなご飯も食べさせてもらつてないのだろう。こうなつたら格別に美味いご飯を作つて笑顔にさせてやる)

「よし!」

ベルトは両頬を叩いて気合いを入れ、キッチンへと向かつた。

☆

テーブルには色とりどりの料理が不規則かつ綺麗に並べられている。楽しみに取つて置いてあつた大きめのビーフステーキや、豆のサラダ、ミネストローネからデザートのフルーツ盛り合わせなどなど。（よし。我ながら良い出来だ。毎日、毎週、毎月一人飯食つてる俺にはこれくらい朝飯前だ！シルヴィちゃんの反応はどうだ!?）

「……ご主人様。もしかしてお客様でも来られるのですが？」でしたら私はどこかに隠れていた方が良いのでは？」

（そうきたかあ……）

シルヴィはご飯にも目を向けず早く隠れようと床から立ち上がる。「違う違う！これはシルヴィちゃんのご飯だよ！長旅でお腹も空いてるでしょ？」

「え？……」

シルヴィはここにきて初めて動搖を見せた。まさか自分のご飯だとは思つてもいなかつたようだ。

「……このような豪華なもの私にはもつたいないです。それにまだ……悲鳴を上げてないですよ？」

「悲鳴？」

シルヴィの言葉の中にある違和感のある単語を思わず聞き返してしまう。そもそもそうだ、普通の日常を送っている普通の人間にはそう聞き慣れている単語ではない。

「はい。以前のご主人様は私の悲鳴を聞くことで大変喜んでくださいましたし、ご飯も私が悲鳴を上げた日だけは少し豪華にしてくださいました」

シルヴィは辛かつたであろう過去を話すと昔の火傷が痛むのか自分の両腕をさするように抱きしめた。そんな彼女を見たベルトはシリヴィの傍に寄つて彼女の白銀の頭を優しく撫でつけた。

「そうだったんだ。……でもこれからはそんな辛い思いさせないから」「？」

そのベルトの行動にシルヴィは困ったように首を傾げる。

(この子は俺が守つてあげたい。別にやましい気持ちからなんかじや

ない、ただこの子、シルヴィを笑顔にさせたい。ただそれだけだ）

「よしーご飯にしようか」

ベルトはそう言うとシルヴィを席につかせ初めての二人の食事を始めるのであつた。

☆

「ご馳走様でした」

「・・・ご馳走様、でした」

ベルトは満腹に満たされたお腹を上下に何度もさする。シルヴィはというと食事が終わると困惑した表情で視線を泳がせている。こんなに満足ゆくまで食事をしたことはなかつたのであろう、初めて感じる満腹感。だがそれと相まつて伺えるのが不安や疑心の色である。「この後は・・・どうなさいますか？」

シルヴィは手にしていたフォークをテーブルに置き、ベルトに向かつて尋ねた。その一瞬をベルトは見逃さなかつた。シルヴィのフォークを持つていた細い手が僅かに震えていたことを。

「そうだなあ、じゃあこの家の中を案内しようか。どこにどの部屋があるか知つておいたほうが良いしね。これから住むんだから」

ベルトは笑いながらそう伝え、シルヴィになるべく恐怖心を抱かせないように手招きでついてくるように促す。

「はい、承知いたしました」

シルヴィは恐さを胸の内に押し殺しそう言うとベルトと一定の距離を保ちながらついてくる。その距離は目測2・5mほど、さすがに1日目の少し豪勢な食事だけではダメか・・・と、ベルトは頭を垂らした。

それからベルトはシルヴィに無駄に広い病院内を一部屋一部屋簡素な説明をしながら回つた。診察室や物置、トイレスそしてベルトの自室。そこで今までずっと頷くだけだったシルヴィが初めて質問を口にした。

「すみません、図々しいのですが私はどこで寝たら良いですか？場所が無ければ外でも私は平気ですので」

と、シルヴィは淡々と言うがベルトがそんなことさせるわけもな

い。それにここは病院だ、使つてない部屋にベッドなんていくつもあつた。

「女の子にそんなこと言えないよ。じゃあシルヴィちゃんはこここの部屋を使つて。一応、お客人が急遽泊まることになつたときを使つてもらう部屋なんだけど、俺がオーナーになつてから一回も使つたことがかつたな」

少しでも和んでもらおうと冗談交じりに笑みも混ぜベルトは言った。シルヴィは引け目を感じているのか何か伝えようとしたが、「……それでは、ありがたく使わせていただきます。もしこの部屋が必要になつたら教えてください」

「うん、そうするね。今日はいろいろあつたから疲れたよね。夕食の時間になつたら呼びに来るからそれまで休んでて」

そう言い残してベルトは部屋を後にしようとドアノブを掴んだそのとき、背中から今にも消えてしまいそうなほど弱弱しい声が聞こえた。

「あの、ご主人様。私は……これからどうなるんですか？」

シルヴィは初めてベルトと視線を合わせてそう問いを投げかけた。シルヴィは今までとの待遇の違いが激し過ぎて何か裏があるのではないかと不安を隠せないでいた。それからシルヴィはまた視線を足元へ落してしまう。

「私は悲鳴を上げることが得意です。それに力はありませんが雑用仕事をやります。御飯も少量で私は満足です。だから……どうか、お手柔らかにお願いします」

シルヴィはこちらの返事を聞く前に続けて言葉を紡ぎ、頭を深く下げた。まだシルヴィとの心の壁はとてもなく大きいものなのだとベルトは改めて感じた。

☆

ご主人様が部屋を出ていかれてから一時間ほど経つた。

(ダ)主人様は私なんかの奴隸のためにわざわざご飯を作つてくだけつたり、貴重なお部屋を一室貸してくださつたり……とても親切にしてくださつてます。でも私はそんなご主人様が怖い。実はご主

人様には裏の顔があつて、時が来たら優しくしてくださつた分痛くて
苦しいことをなさるんじやないかと)

「私は奴隸。どこに行つても扱いは昔と一緒に。ご主人様の望むことだけを私はすれば良いの」

シルヴィは自分に奴隸であることを言い聞かせ続けた。

奴隸との生活　1日目　夜　「奴隸少女の涙」

シルヴィイがこの家に来てから長いようで短かつた1日が終わろうとしていた。シルヴィイは部屋に案内されてからずっと出てこない。ベルトが呼びに行く、と言つてあるのだから当たり前だ。

現時刻は7時。そろそろシルヴィイもお腹を空かす頃合いだろう。「ご飯にしたいが昼飯を豪勢にしすぎて材料がないな。書類まとめて買い出しにもいけなかつたしな」

ベルトはと、いうとキッチンの主である冷蔵庫様と睨めっこをしていた。ああでもない、こうでもないと一人で戦苦闘していると。

「あの、ご主人様」

「うわっ!!」

思いがけない奇襲を受けたベルトは情けない声を上げ、ビクツと身体を浮かせた。ベルトはそんな自分の女々しさに恥じらいながらもシルヴィイの方へ振り向く。

「シルヴィイちゃん、どうしたの？お腹空いた？」

ベルトは顔を林檎のように赤くして尋ねる。シルヴィイもベルトを驚かせてしまったことを申し訳なさそうに顔を曇らせ

「も、申し訳ございません。驚かせてしまって」

「ううん、気にしないで。それで？」

ベルトは自分が怒つてないことを証明するように笑顔でシルヴィイと同じ目線まで顔を持つてく。子供には同じ目線で話すことで警戒心を和らげてくれると聞いた。

シルヴィイは気まずいのか視線を左右上下に泳がせ、下を向いて言葉を続けた。

「あの、私にできる仕事はないですか？難しいことはできませんが掃除とか洗濯、お皿洗いなどはできると思います」

今まで雑用の仕事をするのが日課だったシルヴィイには休むとは何をすれば良いのか理解できない。逆に仕事を任せられないことがシルヴィイは怖かった。この家に奴隸なんて必要ない。そのうち捨てられるのではないかと。

ベルトも薄々とはそのことに気づいていた。

(今まで働くことが当たり前だつたんだから、急に仕事がなくなつたら不安にもなるよな。軽い仕事くらいなら任せてみようかな)

「そうだね、働く者食うべからずとも言うし。じゃあ今から夜ご飯を作るから手伝つてもらつてもいいかな?」

シルヴィは初めて仕事を任せられたことに安堵しているのか素直に頷いた。それからベルトとシルヴィは一緒にキッチンへと向かい、料理を開始する。

☆

「シルヴィちゃんは俺が切つていくレタスを水で洗つてもらつていいかな?ときどき虫が挨拶しに出てくるから気をつけてね」

「は、はい。でも良いのですか?」主人様のお召し上がるものに私なんかが触れてしまつて」

ベルトはシルヴィがときどき発する彼女自身を卑下する言葉には深く聞き返さないことにした。ベルトも聞きたくないことであり、シルヴィ自身も言つていて嬉しい内容ではないだろう。

「大丈夫、大丈夫!ほらほら、早く洗わないとどんどん切っちゃうよ!」

ベルトは慣れた手つきでどんどんレタスを切つていく。シルヴィが昔のことを思い出してしまった前に今の作業に集中していくほしいからだ。

「え、あ、はい」

シルヴィはわたわたと不慣れな手つきでレタスを洗つていく。その必死にレタスを洗つて いる姿が今日一番、女の子らしい姿を見れたとベルトは嬉しく感じた。

それから簡素なサラダは間も無く完成した。次に作るはハンバーグ。

「はい、これを持つて」

ベルトが渡したのはハンバーグのもととなるひき肉。それをシルヴィは不思議そうにまじまじと見つめている。

「・・・これをどうすればよろしいですか?」

「うん、こうやって両手でペチペチして形を整えるんだ。星型でもハート型でも好きな形にして良いよ」

シルヴィはその言葉に頷きながらも戸惑うように控えめなペチペチをしている。型は普通に丸で作っているようだ。

☆

完成！とはいっても昼のご飯と比べるとシンプルなメニューだ。シルヴィが洗ってくれたレタスを基盤に作ったサラダ、2人でペチペチして作つたハンバーグ、それと昼に余っていたミネストローネ。ベルトが両手を合わせるとそれを見たシルヴィもおずおずと両手を合わせた。

「いただきます」

「・・・いただきます」

こうしてシルヴィとの二度目の晚餐は始まるのであつた。するとシルヴィはどこか困惑した顔でベルトに尋ねる。

「あ、あの・・・このハンバーグ・・・」

シルヴィが持つている器のハンバーグは彼女が整えたひき肉の形とは全く違つていた。それもそうだ、そのハンバーグはベルトがシリヴィを喜ばせるために作つたハンバーグなのだから。

「ああ、可愛いでしょ！クマさんの顔を意識して作つてみたんだけどどうかな？」

その形は一つの大きいハンバーグに二つの小さいハンバーグ、耳を意識してくつつけたものだ。顔はケチャップで描いている。こんなことしたことないベルトのクマさんの顔は少し歪んでいた。

「わ、私が食べてしまつてよろしいのですか？」

「もちろんだよ、シルヴィのために作つたんだから。たくさん食べて」シルヴィは反論のため口を開こうとした瞬間、ベルトはシルヴィの柔らかい髪を撫でつけそれを遮る。

シルヴィは納得のいっていない様子ではあつたが結果、

「・・・ありがたく頂戴いたします」

その返事にベルトはテーブルの下で小さいガツツボーズをしたのであつた。

☆

私は今、ご夕食を頂いてから自分の部屋にいます。ご主人様と一緒に食器を片付けた後にまた休憩時間というのをいただきました。

「・・・お腹いっぱい。こんなのは初めて」

私は少し膨れた自分のお腹を一撫でしてベッドに腰掛ける。ベッドは優しくシルヴィを受け入れる。

「お布団もフカフカで・・・くんくん、良い匂いがする」

つい最近まで薄汚い倉庫のようなところで寝起きしていた。奴隸なんだからそれが当たり前。でも今のご主人様は?こんなに優しく、人として扱われたのなんて久しぶりだった。

「なんでご主人様は私みたいな奴隸に優しくしてくれるんだろう」

シルヴィは両足を抱き込み足の火傷を撫でる。こんな醜い姿の私なのに嫌な顔なんて一度もしてなかつた。ついさっきまで気づかなかつたけどご主人様、私の作つたハンバーグはご主人様が食べてたんだよね。普通の人間の方なら絶対気持ち悪がられてること。

「私・・・私分からない。もしご主人様のことを信じてしまつて裏切られたら・・・」

そんな重い部屋の空気を破つたのはドアのノックの音だ。その主が誰なのかは聞かなくてもシルヴィには分かる。

シルヴィはベッドから降り、ドアを開ける。

「はい、どうなさいましたかご主人様」

思つていた通りそこに立つっていたのは主人であるベルト様であつた。

「いや、お風呂が沸けたから知らせに来たんだ。もしかして寝るところだつたかな」

「いえ、そんなことはありません。何から何までありがとうございます」

お風呂まで支度してくださつたのですか。命令してくだされば私が沸かしましたのに。

どうしてそこまで親切にしてくださるのでですか?

ご主人様は奴隸のことを醜く思わないのですか?

なぜ殴らないのですか？

なにか目的でもあるのですか？

私の頭の中には様々な疑問が吹き返す。それを胸の内に留めておくことができず私は勝手に喋り出していた。

「ご主人様はどうして私なんかに優しくしてくださるのですか？私の身体の傷を見て気持ち悪いって思わないのですか！？…もし私の悲鳴を聞くことを我慢しているようならそんなことしなくて大丈夫ですか！…これ以上優しく…しないで…ください」

私は自分の言っていることが自分でも理解できなかつた。それでご主人様は理解しているのかのないように私の言葉を正面から受け止めてくれていた。

私の片目から何かが流れ落ちてくるのを感じた。今までどんなに痛くて苦しいことをされてもこんな辛い感情を抱くことはなかつた。「殴りたいなら殴つてください構いません…他のことをお望みならなんでも言つてください！どんなことでも耐えてみせますから！だからっ…っ！」

私の身体が急に暖かく、優しく包まれた。

「ご、ご主人様…？」

その正体はご主人様だつた。ご主人様は私をその大きくて硬くて、でも優しい腕が包んだ。なんだろう、この気持ち。

「俺は絶対君を奴隸としてなんか見ない！別に君を陥れるためにご飯やお風呂を沸かしたわけじゃないよ。たしかに君は今まで奴隸だったのかもしね。たくさん辛くて酷いことをされてきたかもしね…でももうそんな思いしなくて良いんだ。君のことは俺が絶対守るから、だから此処にいて良いんだよ」

私は泣いていた。悲鳴を上げたときに出した涙とは明らかに違う。なんだろう、これ、でも…嫌な気持ちじやない。

私はなにかが切れてしまつたかのようにご主人様の腕で赤ちゃんのよう泣き喚いたのであつた。

☆

数十分後、シルヴィは寝てしまつた。ベルトは彼女をベッドに寝か

せ布団をかけてあげる。

「張り詰めてた緊張や恐怖の糸が一気に切れたんだろうな。あんなに悩んでたなんて」

ベルトはシルヴィの頭を二度、三度と撫で下ろす。シルヴィは涙のせいか、目の周りが少し赤くなっていた。

「君のためなら何でもしてあげたいって、そう思えたよ。今日が初対面なのにね」

ベルトはゆっくり立ち上がりと出口へと向かう。

「お休み。また明日」

ベルトは音を立てないようにゆっくりとドアを閉めた。

奴隸との生活 2日目 朝 「奴隸少女の笑み」

チュン、チュンチュン

どこからか鳥の囀りが聞こえてくる。窓からは爽やかな風が優しくベルトの頬を撫で、朝が来たことを知らせる。だが、ベルトはその知らせを受ける前にすでに起き一人悩んでいた。

「どうしよう・・・いきなり会った初日に抱きしめてしまうなんて。こんな男として最低じゃないか?まあ最低だな」

ベルトは昨日の夜を思い出す。自分の存在を卑下し素直な気持ちをさらけ出して号泣するシルヴィをベルトはつい抱きしめてしまった。

「まずは謝ることが先決だよな。女の子に許可なく抱きついたんだから謝るのが常識だ・・・嫌われたらどうしよう」

ベルトが一人ベッドの上でもがいていると
コンコン

誰かがドアをノックした。そのノック音を追いかけるように控えめな声も聞こえてくる。

「あ、あの、ご主人様。おはようございます。起きてらっしゃいますか?」

ドアの向こう側からベルトが起きているのか確かめる女の子が1人、シルヴィだ。昨日のことを訴えにきたのかとベルトの焦りはますます悪化する。

「う、うん!おはよ。今開けるね」

ベルトは両手で頬を叩いて一喝。謝ることを決意し、ベッドから五歩程のドアの前に立つ。ドアノブに手をかけ手前へとドアを引くと、なぜか怖がっているのか、少し震えるシルヴィがいた。

「わざわざ起こしに来てくれた、のかな?ありがとね」

目を合わせずシルヴィは華奢な首を横に振った。

「いえ、ご主人様に感謝されることでは・・・」

シルヴィはベルトに一度頭を下げ言葉を続ける。

「昨日は取り乱してしまって申し訳ございませんでした。それにご

主人様に多大な迷惑をおかけしました。申し訳ございません

ん」

「そんな！シルヴィが誤ることじゃないよ！……俺こそごめん。急に、その……抱きしめたりなんかして」

申し訳なさそうに俯いているシルヴィに、ベルトは深々と誠心誠意込めて頭を垂れる。

「もし俺のことを恨んでいるならこの頬に思いきりビンタくらいかましてくれ！！……」

「え……あの……」

顔を上げたベルトの両目と口は堅く結ばれていた。ベルトとシリヴィの二人の間には静かな沈黙だけが流れた。

「ジ」主人様？あの……わ、私は別に、そういうことをしに来たわけではなくて、いえ、私なんかが主人様に手を上げるなんてことできるはずもなく……えっと……」

「……」

「私はただ昨日のお礼と迷惑をおかけしたお詫びをしたくて……」

言葉に詰まってしまい反応のないベルトに困惑するシルヴィの様子が、目の見えていないベルトにも容易に想像できてしまいベルトの口元は微かに微笑みだす。

「……ツブ、ハハ、あははは。シルヴィちゃん慌てすぎ」

遂に我慢しきれず、ベルトは声を上げて笑い出した。いきなり声を出して笑い始めたベルトに驚きつつも、その純粋な笑顔に釣られてシリヴィの口元も穏やかに微笑んだ。

「あ！シルヴィちゃん笑つた！」

「え？……」

シリヴィはすぐさまベルトに顔が見られないよう背を向けた。シリヴィはベルトに指差しで指摘されてから自分が笑っていることに気がついたのだ。

今まで愛想笑いとして笑みを作ることはあった彼女だが、自分から無意識に笑みを作るなんてことなかつた。

「今笑つてたよね!?」

「笑つてません・・・」

「じゃあなんでこっち向いてくれないの?」

「そ、それは・・・こんな火傷で醜い顔を主人様に見せたくないからです」

「またまたう。笑った顔も可愛いよ?」

「え?かわつ・・・そ、そんなことないです!もう私はこれで!」

廊下をスタッタと小走りで駆けていくシルヴィをベルトは心から安堵した様子で眺めていた。昨日この家に来てから自分との会話の中で笑顔を見せてくれることなんてなかつた。正直、一ヶ月、もしくは一年、このまま心を開いてくれないものかと思つていた。

「さすがに最後のは・・・うかつだつたかな」

と、一人呟いていると・・・

ガタ、ガタガタガタガタ、ドス!!

そのものすごい音は何かが階段を転がり落ちていくような打音。

その発信源は・・・

「シルヴィ??!!」

ベルトは音の発信元へと全速力で駆けて行つた。